

カンボジア通信

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan) 会報

2012 年 6 月 63 号

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5
JICA地球ひろば気付

カンボジア教育支援基金事務局

info@keaf-japan.com
http://keaf-japan.com



国道 1 号線

メコンまたぐ日本橋工事始まる

「貧しい村」に変化の風か 校長先生は「世代交代」へ

3 月の現地訪問はいつものように、奨学金の年度後半分（3～7 月）と教科書、教材の支援が主目的です。久保田理事と私（金子）が担当しました。ルーティンワークですが、今回も思わぬ勉強をしたり、変化の風を感じたりしました。

米国との戦争、ポル・ポトの恐怖政治、大国の代理戦争という内戦―苦難の半世紀を辛くも生きぬいた世代の校長先生の引退がはじまりました。一方で大学を出て郷里の学校の先生になって戻ってきた若者に会いました。カンボジアも世代交代の時代に入りつつあるとの感を強くしました。

カンボジアとベトナムを結ぶ国道 1 号線。この大動脈はメコン川で一時断ち切られます。プノンペンから支援地域のプレイヴェン州に入るにはフェリーでメコン川を渡ります。大河メコンの兩岸をまたぐ町がネアクルーン。ここに日本の援助で橋が架けられることになり、猥雑とした町が一段とあわたしくなりました。

昨年 12 月の「サッカー教室」のときに、各学校に 10～15 個のサッカーボールを寄贈したのですが、ある小中学校では「もう 1 個もない」というのです??? 「エッ・・・」。びっくりでした。

以下は「2012.3 現地訪問」の報告です。

◆3 月 11 日（日）；プノンペン到着、パラダイス・ホテル入り。中央マーケット近くで、ロケー

ションは申し分ないのだけど・・・。いつの間にかシャワーからちゃんとお湯が出るようになった。

◆12 日（月）午前；ガイドはいつものソワンさん、車は 8 人乗りバン。プノンペンの教科書印刷所で注文しておいた教科書約 1,300 冊を受け取る。ネアクルーンでカンボジア語－英語辞書、チョーク、マーカーなど購入。昼食。

午後；プレイヴェン州を超えてスバイリエン州アンサー小学校へ。予定ではここからチョーチアル中学（同）へ回る。しかし同中学への道路は車通行不能で、教員 2 人がアンサー小学校まで出向いて待っていた。1 人はバンティチャクライ中からプロモルプロム高校に進学した KEAF 奨学生で、卒業 2 年目。昨年末の「サッカー教室」は開けなかったもので、ボール 5 個に空気入れを付けて手渡した。



・ネアクルーンのメコン越えフェリー

どうなる？フェリーの町

予定より早く両校支援がすみ、夕方ネアクルーンの華僑経営のホテルに宿泊。あれ、お湯が出た。メコン越えの橋の建設作業が始まり、日本人も含めて技術者や作業員の出入りが増えるのを見越して増改築したからだという。

（2 頁に続く）

架橋地点は町の2キロほど上流、完成は2015年。コメ満載の大型トラックやベトナムからのアンコールワット観光客を乗せた大型観光バスがこのフェリーの町を素通りすることになる。町の様相は一変するだろうし、KEAFが支援してきた沿道の貧しい農村にも大きな変化の風が吹き込んでくるに違いない。

◆13日(火)午前；プラテアート中学(プレイヴェン州、以下各校)。ルン・サン校長が待ち受けていた。教科書370冊を届け、支援要望を聞く。来年度奨学生は10人。6月面接の日程を伝える。

珍しい女性校長

1号線を西へ戻り、道路に沿ったコンボントゥラバイ高校へ。教科書100冊と25人分の奨学金を届ける。奨学生の名前を付した袋に1カ月分\$5、年度後半の5カ月分、合計5袋、\$25。セイク・セイチョラム校長は、卒業したKEAF奨学生の「その後」の調査をすると約束してくれた。

同校長は、昨年12月末の「サッカー教室」の時は元気で、生徒と一緒にボールを蹴っていたのに、その後、軽い脳梗塞を患って右側の口元が歪んで話しづらそう。しかし、どんどん良くなっているとのこと。来年6月、60歳になり定年退職という。ポル・ポト恐怖政治が始まった時プノンペン的大学生だった。辛くも生き延びた話を何度か聞いた。サリー副校長も同時期にやはり定年退職。



昔取った杵づか？ セイチョラム校長

午後；1号線をさらにもどってタッコー高校。日本の支援団体から数百台の中古自転車が届け、そのうち15台がソワンさんを通して同高校など地域の3高校に配られる。まず贈呈式に列席。

チェア・ソティ校長に教科書120冊と2人分の奨学金支給を委託。校長先生は女性。カンボジア社会では女性の進出は目覚ましく、女性校長はもう珍しくないという。KEAFの約90人の奨学生も男女ほぼ半々だ。

卒業生で大学の教育課程(4年+2年)を修了した若い英語の先生が入った。ボクたちに英語で話しかけて実地練習に努めていた。両親とも同高校の先生とのこと。大学を終えて郷里に戻って先生になる若者が始めている。地域教育の向上にとってもいいことだと思う。

ネアクルーン2泊目。

◆14日(水)午前；バンティチャクライ中学。校長は教育省の会議に呼ばれてプノンペンへ行き留守。教科書120冊を届け、支援要望を聞く。

次はソンボン小学校。校長は教育省会議。教育省の会議の回数が随分増えた。副校長ソーイ・ロットナーさんらと会う。教科書支援は今回はなし。支援者からのカバン3個、注文のチョーク30箱。3年間務めた若い女性教員が来年度からプロモルプロム小学校へ転勤が決まった。

郡の中心地の町まで出て昼食。

“New Year”は4月—なぜ？

「稲作」で決まるカンボジア暦

午後；プロモルプロム小・中・高校。定年退職の校長を継いで副校長から昇格したポーン新校長らとあう。新校長はポル・ポト以後に大学を出た新世代。先々代は1990年代にはいってポル・ポト勢力がこの地域から追い出された後に学校をつくり、以来20年余り校長を務めて退職、そのあとの2代目も2年務めて退職を迎えた。新校長は英語も話すし、パソコンも使う。新副校長は女性。

(3頁に続く)

新しい副校長がモンキーバナナを差し入れ。前校長も加わって7、8人の先生と雑談、懇親。カンボジアの正月はなぜ4月なの？が話題になった。カンボジア文化に詳しい先生を呼んで聞いた。

4月はコメをはじめとする収穫を済ませた農閑期、それを祝うのが「正月」。そして“New Crop Year Starts”という意味で“A Happy New Year”なんだそうだ。それでもなお、日本人としてはなぜ「4月」が「新年」なんだろう？という思いが残るのではないだろうか。

プロモルプロム小・中・高校への教科書支援の合計は240冊。ネネアクルーンに3泊目。

WFPのコメ支援トラックがきた

苦しい標準農家—1畝で年収\$200

◆15日（木）午前；プレイトープ小・中学校。校長は教育省会議。副校長らと話す。洪水で校庭は水没、校舎は免れた。だが、10月の1カ月間の授業が大きな影響を受けた。両校（同じキャンパス）訪問は4輪駆動では無理で、今回唯一、バイク・タクシーに乗る。

幸い稲刈りは済んでいたの、コメの被害はなかった。この地域の農家の家計を聞いた。1ヘクタールの収穫が5.5トン。肥料、水を引くポンプ使用代などを差し引いて残るのが\$200。家族の年間消費量の約1トンが出せない家も少なくないという。貧しいのだ。

ちょうど国連の世界食糧計画（WFP）の大型トラックが支援米袋（50kg）をどっさり積んで、村民に配りに来ていた。

サッカーボール、どこに消えたの？

教科書支援155冊を手渡して、支援要望のリストをもらう。サッカーボール16個とある。

問い；昨年暮れの「サッカー教室」の時に15個ぐらい置いていったはずだけど？

答え；生徒たちが使っているうちに、もうみんななくなった。

問い；ボールはちゃんと管理しなかったのか？

答え；自由に使わせたから。

問い；??????

というわけで厳しい苦言を呈した。

「ボクたちが持ってきたサッカーボールは、日本の子どもたちが自分たちの使う分を節約して分けてくれたものだ。もう少し大切に使ってほしい。先生が管理して生徒たちがみんなですべて使えるようにしてくれないか。なくなった、また頼む、といわれても、そうですか、分かりましたというわけにはいきませんよ」



サッカーボールをたくさん贈った

このあとでもう一枚の要望書が出てきた。ガイドのソワンさんはそれをちらりと見ただけで握りつぶし、強い口調で何か叱りつけた。学校に近いクリークに架かる橋が洪水で崩壊したので、それを直してほしいという要請だったという。

ソワンさんはこう「お説教」したそうだ。「君たちは考え違いをしている、せっかく支援してもらったサッカーボールもほったらかしにして、なくなったからまた欲しいと要求する、自分たちがなすべきことはしないで、すぐ人に頼ろうとするのはいけない、カンボジア人のいけないところだ。KEAFの支援は政府や大企業レベルの支援とは違うことがまだわかっていないの」

（金子 敦郎 記）

「日本大好き」のカンボジア人

“DNA” 欲しがったシアヌーク殿下

隣国タイとベトナムには「歴史問題」

カンボジアを訪問した人のほとんどは、親日的な国という印象を持って帰ると思います。カンボジア人はなぜ、日本を大好きなのか。理由はいろいろあります。紹介しましょう。

第2次世界大戦のとき、日本は西欧諸国の植民地支配下にあった東南アジア諸国を軍事占領しました。激戦が戦われ現地の人々に破壊と犠牲を強いたシンガポールやフィリピンと違って、日本軍の仏植民地カンボジア、ラオス、ベトナムへの進出は、フランスがドイツに降伏したのに乗じた「進駐」だった。カンボジア、ラオス、ベトナムのインドシナ3国の人々には、フランス支配を終わらせてくれてありがとうという気持ちが残りました（ベトナム北部では、日本軍占領が多数の犠牲者を出した飢饉を引き起こしたとの反日感情も）。

大戦が終わるとフランスが植民地復帰を策してインドシナ戦争（ベトナムとラオス）が起きます。敗退したフランスに代わって米国が軍事介入したため戦争が再発、1975年まで続きました。カンボジアは元首シアヌーク殿下が「綱渡り外交」で中立を保ちながら1953年独立を実現しました。

シアヌーク殿下はすぐ日本を訪問、支援を要請して、こういいました。「日本の若者が大勢カンボジアにきてカンボジア女性との間に、優れた子どもがたくさん生まれれば嬉しい」。ユニーク発言で知られる殿下ですが、本当の話です。日本の青年はカンボジア女性にもてます。殿下の思いがカンボジア社会に根を下ろしたのかもしれません。

その殿下は外遊中の1970年、親米軍部のクーデターによって追放されます。これでカンボジアも戦争に巻き込まれてしまいました。その後の波尔・ポト恐怖政治、大国代理戦争という内戦へと

長く続く悲劇のはじまりでした。

隣国との間の「歴史問題」も背景にありそうです。世界遺産アンコールワット文明を遺した当時のカンボジアはインドシナ半島のほぼ全域を支配する大帝国でした。それが隣のベトナムとタイの挟み撃ちにあい、領土を蚕食されて、大帝国時代の10分の1かそこらの小国になりました。

カンボジア人（クメール民族）の祖先は海洋系でインドのヒンズー文明を背負って移動してきたとされ、周辺の中国文化系民族と違っています。

それやこれやでカンボジア人は周辺民族の頭越しに、歴史的な恨みもなく頼りがいのありそうな日本に好意を寄せるのではないかと思います。

カンボジアは1993年の国連暫定統治機構による停戦監視・総選挙を経て国家再建の道を歩き始めました。同機構代表は日本人の明石康事務次長でした。日本政府は自衛隊を派遣するなど積極的にカンボジア支援に取り組み、以来カンボジアの最大の援助国になっています。

経済は04年ごろから年10%を超える高度成長に入りました。リーマンショックも乗り越え10年は7%に回復しました。1人当たりGDPは10年で\$260から\$760へと3倍増（でも、まだベトナムの7割、タイの2割）。日本の資金援助は1491億円、技術協力594億円、円借款313億円（いずれも累計）。これが経済発展の土台になりました。

プノンペンの道路は高級日本車がひしめき合い、この数年高層ビルも珍しくなくなりました。最近、中国などからカンボジアへ工場を移す日本企業が増えています。KEAFが支援する村でも日本語を学んで日本企業で働くというのは子どもたちの夢。カンボジア人はますます「日本大好き」になっていくと思います。（金子 敦郎 記）

「高橋奨学基金」

の提供を受けて
奨学生の枠を増やしました

久保田信一理事の長年の友人である高橋浩子さん（東京在住）から300万円の奨学金基金の提供を受けました。ありがたく頂戴しました。

「高橋奨学金」はさしあたり9月の新学期（カンボジアの学年は9月から8月まで）から高校生への奨学金に充てます。

高橋さんはいずれ大学進学者にも奨学金の対象を広げたいとの意向をお持ちです。高校生への3年間の奨学金支給の推移を見たうえで、大学奨学金へ進むかどうかのご相談をすることになっています。

「高橋奨学基金」の提供を受けたことにより、6月の現地訪問での新年度奨学生選考の面接で高校1年生（10年生）枠を10人増やして現在の35人から45人にします。3年後には奨学生全体の枠は135人になります。

KEAFと日本国民にお礼 両高校から感謝状が届く

3月訪問のさいタッコー、コンボントゥラバイ両高校からKEAF・Japanへの感謝状をもらいました。日ごろの支援にお礼の気持ちを述べてくれたものです。昨年12月の「サッカー教室」が特に嬉しかったようで、そのあとでガイドのソワンに託し、日本語を勉強しているソワン夫人が翻訳してくれました。

◇タッコー高校の感謝状（要旨）

学校の先生と生徒を代表してカンボジア教育支援基金及び日本の皆さんに感謝の気持ちを表明します。



プロモルブロン高校の生徒

これまでの文房具、スポーツ用具、コンピューター、奨学金、そのほかの様々な支援品がいろいろなものが不足している学校にとって大変役に立っています。

この2012年にKEAFおよび日本の皆さんの健康、活躍、成功を祈ります。

校長 チェア・ソディ

◇コンボントゥラバイ高校感謝状（同）

セイク・セイラム校長および先生、生徒を代表して、このたびのスポーツ支援にたいしてKEAFと日本国民の皆さんに感謝の気持ちを申し上げます。

KEAFの支援のおかげで学校の困っていることがよくなりました。その一つで、スポーツも向上しました。これからも支援を続けてくださることを期待しています。

カンボジアが困っているときに日本国民が助けしてくれることは、両国が永遠の友人であることを示しています。

KEAFと日本の皆さんの健康、活躍、成功をお祈りします。

副校長 ハイ・サリー

ありがとうございました (2012年3月1日～2012年5月20日)

年会費、寄付金、奨学金をお振込頂きました方々に心からお礼申し上げます (敬称略させていただきます)

(東京) (神奈川) (神奈川) (東京) (埼玉) (東京)
(東京) (東京) (神奈川) (神奈川) (福岡) (東京)
(千葉) (東京) (東京) (東京) (東京) (東京)
(京都) (宮崎) (神奈川) (神奈川) (東京) (東京)
京) (東京) (東京) (兵庫) (東京) (東京) (東京)
京) (東京) (埼玉) (東京) (神奈川) (東京) (大阪)
(東京) (静岡) (東京) (東京) (東京) (東京)
(東京) (東京) (茨城) (東京) (千葉) (東京)

匿名の方

※お名前は個人情報なので伏せて掲載しています

東芝国際財団助成金

残念ながら選考漏れでした

東芝国際交流財団の助成金は 2013 年度選考漏れになりました。昨年9～12月に同財団の助成金の交付を受けて「日本語」「子どもの遊び」「星の観測」「サッカー」と4つの「教室」を開き、子どもたちや先生、地域から大歓迎され、継続してほしいとの強い要望を受けました。残念ながら継続的に開催することは難しくなりました。

奨学金や教科書、教材の支援にくわえて、こうした「教室」シリーズは子どもたちの生活を豊かにし文化・教養をはぐくむものとして大切だと考えています。なんとかフォローアップできないか、知恵を絞っています。

《ボランティア 大募集》

☆現地活動スタッフ；カンボジア現地で子どもたちの支援活動に参加するスタッフが手薄です。手助けして下さる方はおられません。

現地訪問はルーティンワークとして①6月の奨学生面接、②10月の奨学金支給(学年度の前半分)、③3月の奨学金支給(後半分)、の3回があります。これらの訪問の際には、併せて現地学校の支援要望(教科書、教材、文房具、スポーツ用具、その他諸々)を聞きます。そしてKEAFの基本方針に沿った要望か、対応可能かなどをチェックし、現地調達可能なものは価格調査をします。

他に必要に応じて1～2回、期間は各回ほぼ1週間。食

《支援の品ありがとうございます》

手提げカバン3、ハンドバック1；(東京)
大型スポーツバッグ；(神奈川)
早い機会に現地の皆さんに届けます。

《事務局から》

今 63 号会報は、顔写真つきで紹介している新奨学生
の頁がないので、6 頁建てになりました。



道路を占領したアヒルの群れ

事、宿泊、交通の事情は年々よくなっています。子どもたちとの触れ合いが結構楽しい。一度参加しませんか。

☆会報発行作業；会報『カンボジア通信』発行作業を助けてくれるボランティアを募集しています。年4回、3月、6月、9月、12月のそれぞれ第1土・日曜午後。紙面の印刷、袋詰め、宛名貼り、発送の作業をします。毎回850通を会員、支援者の皆さんに送っています。

☆連絡先 info@keaf-japan.com
03-3418-7003 金子 敦郎